http://alce.jp/journal/ 第22巻（2024）pp. 261 - 272 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

フォーラム

視覚的媒体を用いた第二言語習得研究

［書評］Paula Kalaja, Sílvia Melo-Pfeifer（編）*Visualizing multilingual lives: More than words*

鈴木 栄*
（東京女子大学）

概要

本稿は，Paula Kalaja, Sílvia Melo-Pfeifer（編）*Visualizing multilingual lives: More than words*（2019, Multilingual Matters）の書評である。本書は，外国語学習に携わる研究者たちが，研究方法として革新的なビジュアル・データを使用した研究をまとめたものである。第一部は，「多言語における自己」（多言語環境にいる学習者と彼らの言語に関する研究），第二部は，「多言語学習者（学校，大学，留学などの異なる環境において英語か日本語を学ぶ英語・日本語以外の母語をもつ学習者）のアイデンティティ」，第三部は，「多言語教師教育（第二言語あるいは外国語教育に携わる教員養成に関する研究）」をテーマとしている。本稿では，掲載されている各研究において使用されるビジュアル媒体とビジュアル・データを使う研究方法に焦点をあて，第二言語あるいは外国語教育研究におけるビジュアル・データ使用の利点と課題，および，ビジュアル・データを使用する外国語教育研究の今後の展望について論じる。

キーワード：ビジュアル・データ，ビジュアル・ナラティブ，多言語社会，多言語教育

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

1. ビジュアルに表現される言語学習と学習者

ビジュアル調査法は，社会学における社会調査の一つの方法であり，ビデオ，映画，TV 番組，絵画，彫刻，ポスター，イラスト，スケッチ，漫画，絵はがき，建築物，景観などを基にした「ビジュアル・イメージ」を分析・解釈し知見を提示する調査法である（後藤，2009）。

第二言語習得研究においてビジュアル・データを利用する研究が登場したのは，2008年に Palgrave Mcmillan から出版された *Narrative of learning and teaching EFL*（Kalaja et al, 2008）であったと筆者は認識している。この著作は，EFL（English as Foreian Language）の文脈における学習と教育についての研究報告をまとめたもので，英語の学習に関わる主観的な意味や学習の心理的影響に焦点を当てている。

ビジュアル・データの登場背景には，時代の変化が影響している。ソーシャルメディアに囲まれた生活を送る学習者たちは，マンガ，写真，コラージュ，

* Eメール：sakaes@lab.twcu.ac.jp

インスタグラム，ゲーム，アニメなどのビジュアルコンテンツに慣れ親しんでいることが多い。日本においては，特にマンガ文化が浸透しており，学習者は，幼少期から絵画やマンガを通じてビジュアル表現に親しんできた。SNS上での，絵，マンガ，イラスト，写真，動画を用いた自己表現の場も多く見られる。そうした学習者を対象とした研究では，ビジュアル・データも有効であると考えられる。

第二言語習得研究の分野に限らず質的研究におけるビジュアル研究法への注目は高まっており，文献におけるビジュアル・ナラティブ（visual narrative）という用語の頻出がそれを示している（やまだ，木戸，2017；Riessman, 2008）。さらに，第二言語・外国語学習研究においては，「マルチモダル・ナラティブ（multimodal narrative）」の概念の下，言語やビジュアル素材（絵や写真）を組み合わせたデータを用いた研究が見られる（Li, 2011; Menezes, 2008; Pahl, 2004）。

Visualizing multilingual lives: More than words（Kalaja & Melo-Pfeifer, 2019）は，多言語社会における教育に関する研究を集約した書籍であり，ヨーロッパ，アジア，オーストラリア，南アメリカの研究者たちが執筆している。彼らは多言語社会における言語生活を視覚的要素を通じて伝える研究を進めており，ビジュアル表現は，言語による表現よりも感情，記憶，ビリーフを引き出す可能性があると主張する。彼らは，ビジュアル・データの可能性を探求する一方で，言語を否定するのではなく，人間と学びを理解するための手段としてビジュアル・データを使用した研究，ビジュアル・データと言語データを併用した結果を提示し，読者がビジュアル・データの可能性を深く考察するように促している。本書は，第一部：多言語の自己（The Multilingual Self）（4論文），第二部：多言語の学習者（The Multilingual Learner）（7論文），第三部：多言語教師教育（Multilingual Teacher Education）（5論文）に分かれており，それぞれの部でビジュアル・データの使用法と研究結果に焦点を当て，言語研究におけるビジュアル・データの可能性について論じている。

本稿では，ビジュアル・データを使う研究例として *Visualizing multilingual lives: More than words*（Kalaja & Melo-Pfeifer, 2019）の概要と研究例を紹介し，ビジュアル・データを使う外国語教育研究の可能性について論じる。

2. 本書の概要と意義

2. 1. 第一部：多言語の自己（The Multilingual Self）

第一部では，フォーマルな場とインフォーマルな場で異なる言語を使い分ける多言語使用者に焦点を当てる。多言語経験者の学習過程や学習観ではなく，彼らが実際にどのように多言語を使い分けているか，その言語使用に焦点を当てた研究を紹介している。

第一章では，Alice Chikがオーストラリアのシドニーに住む多言語を話す異なる背景をもつ移民12名（13から72歳）を対象とした研究を行った（Chik, 2019）。研究参加者は，自らの言語学習体験を自画像と年表という形のビジュアル・データで表現し，これらのビジュアル・データに基づくライフストーリーやインタビュー結果が収集された。自画像を「小さい話」（small story）として分析する際の課題，特にメタファーを用いた表現が理解を難しくすることが指摘されており，これはビジュアル・データの解釈における重要な側面を示している。研究の結果として，ビジュアル・データの利用は，個人のストーリーをどのように構築するかを考える機会を提供すると同時に，研究者と研究参加者間の協力的かつ公平な関係を築くための有効な手段であることが強調されている。

第二章では，Nayr Ibrahimが，フランスに居住する3言語（フランス語，英語，継承言語）を話す子供たち13名（5歳から17歳）を対象に，アイデンティティと自主性の構築過程に焦点を当てた研究を行なった（Ibrahim, 2019）。子供たちは言葉のデータとともに，絵を描いたり，自分たちの言語が象徴する物品をインタビューに持参するように依頼された。これらのデータを通じて，子供たちのアイデンティティが，実際の場所での人々との交流や，言語と自己にとって価値のある活動に参加することによって形成される様子が明らかになった。ビジュアル・データを研究方法として採用したことで，研究者は，子供たちが多言語を通じた読解力を持ち，多様な表現方法を通して生活している様子を垣間見ることができた。子供たちは，自分たちが「ここ」と「そこ」に同時に属する複雑さを，豊かで細やかに描写表現した。この結果，自分たちのアイデンティティを，複数の文化や言語の中でどのように構築し，使い分けているかについて深く掘り下げることができた。

第三章では，Silvia Melo-PfeiferとAlexandra Fidalgo Schmidtがドイツのハンブルグにおける未成年難民の社会的融合に関する研究をおこなった（Melo-Pfeifer & Schmidt, 2019）。職業訓練校を卒業する学生たちに，「今の私の人生」と「1年後の私の人生」をテーマに絵を描いてもらい，その過程で彼らは，自分たちの未来を想像し，ドイツ語や他の言語が果たす役割について考える機会を得た。住居の問題や新しい言語の学習の困難さについて描きつつも，若い難民たちは統合に向けて非常に前向きな態度と主体性を示した。ビジュアル・データを用いたナラティブは，言語の壁が多言語の自己表現に困難をもたらす際に，彼らに自分を表現するための声を提供した。

第四章では，Muriel Molinéがフランスの大学で学ぶ留学生たちに，現在の生活と未来の生活を社会移動の視点から描いてもらった（Molinié, 2019）。絵には留学生たちのバックグラウンドやヨーロッパへの移動，将来の移動の可能性が表現されている。絵を描く過程で，留学生たちは客観的な状況だけでなく，過去，現在，未来の移動に関連する自分の感情や主観的な視点を描き出し，反映させることができた。その結果，国際的な移動を現実の経験として理解することが可能になり，この理解は心理的，感情的，社会的なレベルで客観的かつ主観的なものでもあることが示された。

第一部では，多言語の環境にいる人たちの自己アイデンティティ構築と言語との関係，実際の言語使用の様相と心理への影響を調べる中で，ビジュアル・データが言語間の橋渡しをすることがわかる。ビジュアル表現だからこそ掴み取ることができる学習者の心模様があり，ビジュアル・データを通して言語の壁を越えて外国語を使用する人々の内面や変化を理解することができる可能性を見ることができる。

2. 2. 第二部：多言語の学習者（The Multilingual Learner）

第二部では，学校，大学，留学といった多様な学習環境で外国語（英語または日本語）を学ぶ学生に焦点をあて，彼らが言語を学ぶことにより揺れ動くアイデンティティについて書かれている。

第一章では，Kristiina Skinnariがフィンランドの学校に通う95名の学習者（9歳から12歳）が英語学習者としての自己ポ－レートを描いた研究を紹介している（Skinnari, 2019）。これらのポートレートは博士論文のために収集されたデータであったが，論文とは別に再分析が行われた。理解しにくいものも含まれていたため，分析しやすい7枚の絵が選択された。ビジュアル・データは独自の意味を持ち，視覚的情報を通じてコミュニケ―ションをおこなう。し

たがって，ビジュアル・データの分析には，視覚的要素と構造を理解し，それらが伝える意味を解釈することが求められる。ビジュアル・ナラティブは，言葉よりも深い洞察力や繊細な分析を必要とし，ビジュアル・データに適した理論的な枠組みが必要である。

第二章では，Liss Kerstin Sylvénがスウェーデン語を第一言語，英語を第二言語とする2人の学習者（17から18歳）の言語に対するビリーフの比較対照を行った研究を紹介している（Sylvén, 2019）。両者はスウェーデンの学校の生徒で，一人は，CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）プログラムに在籍し，もう一人は12年生の一般授業にいる。2名の生徒には，2つの言語を使用して自分にとって重要な出来事の写真撮影を依頼し，その内容について研究者との間でディスカッションが行われた。CLILプログラムで学んだ学生とそうでない学生では，言語に関する見方が異なっていた。CLILプログラムの学生は言語を実用的なツールとして捉え，一方でCLILプログラムでない学生は言語を学習の対象として捉えていることが明らかになった。

第三章では，So-Yeon Ahnが韓国の大学に通う英語専攻の159人の学生を対象に，言語学習がアイデンティティ変容に及ぼす影響についての調査を行った研究を紹介している（Ahn, 2019）。学生たちは，英語学習前と学習後の自己ポートレートを描き，それぞれに言語でのコメントを添えた。マルチモダル分析を用いて，英語学習者のアイデンティティがビジュアルとテキストによってどのように表現されているかを分析した。韓国の学生は，英語習得が心理的，身体的，職業的，人間関係，経験の各面に変化をもたらすと考えていることが明らかになった。この結果から，マルチモダル分析は英語学習者のアイデンティティを構成する様々な側面を捉えるのに有効な調査方法であると結論付けられている。

第四章では，Vera Lúcia Menezes de Oliveira e PaivaとRonaldo Correa Gomes Juniorが，デジタルで作成された多様なモードを用いた言語学習歴（イメージや音）を，ブラジルの大学で人文科学を学ぶ43名の学生の英語学習歴を理解するために使用した研究を紹介している（Paiva & Gomes Junior, 2019）。学習プロセスを理解するために，多様なマルチモダル・データから隠喩（メタファー）と換喩（メトニミー）が特定され，体系的に分類された。これらの言語表現は，学習体験の深い理解を促進するために重要である。分析により，英語は貴重な学習対象であり，役立つ力強い道具の象徴であることが明らかになった。これは，アメリカの国旗やイギリスの国旗に象徴されている。テキストで見つかった主要な視覚的隠喩は，心を容器（知識や情報が入れられるもの），英語学習をゲームや旅（楽しく，挑戦的で時には競争的な活動である）として描いている。

第五章では，Tae UminoとPhil Bensonが日本の大学で日本語を第二言語として学ぶ2人の留学生の長期的な研究結果をまとめた。学生たちは参加した行事の写真を撮影し，これらの写真は留学生の日常生活や景観を記録し共有する手段として使用された。写真を通して，学生たちが，自分自身を第二言語使用者としてどのように見ているかを知ることができた。この研究は，第二言語を使用する経験が第二言語使用者としてのアイデンティティ形成に重要な役割を果たすことを論じている。また，第二言語のナラティブ研究において写真が重要な役割を果たしていることも論じられている。写真は留学生たちの日常を映し出し，研究者は，それを通して留学生のネットワークや参加経験を把握することができる。また，写真と併せて行われるインタビューにより，学習者の学習歴をさらに深く理解することができる。

第二部では，異なる環境における多言語学習者のアイデンティティについての研究をまとめてい

る。ビジュアル・データとして写真やポートレートを使う斬新な研究である。人と人とのコミュニケーションおよび表現は言語だけでなく多様な形があるという共通理解のもと，写真やポートレートをデータとして集める方法は，異なる言語学習者間の研究では有効であろう。特に，学習する言語の初級学習者である場合に，学習言語でデータを採ることは難しい。日本で日本語を学習する学習者は母語が異なる。そうした学習者に母語によるデータ収集は難しいが，第5章の研究のように，学習者が撮影した写真を読み解くことで学習者の内面を理解することができるであろう。ただし，フォローアップ・インタビューでは留学生の母語で行われることが適切であるが，それを書き下ろし分析するためには学習者の母語を共通言語とする共同研究者を入れるなど工夫が必要である。

2. 3. 第三部：多言語教師教育（Multilingual Teacher Education）

第三部は，第二言語または外国語教育における教師教育における研究が集められている。報告されている研究は全て英語教育に関するものであり，多言語教育実習生のアイデンティティ構築に焦点を当てたものである。

第一章では，Ana Carolina de Laurentiis Brandãoが，ブラジルで言語教育の教員課程を履修する18歳から25歳の学生たちが，数回にわたって将来のEFL（英語を外国語として教える）教師としての自己ポートレートを描いた研究を紹介している（Brandão, 2019）。これらのポートレートは他のデータで補完された。分析では，研究参加者の絵画における時間的移行，個人および社会的条件，場所を表現するナラティブが含まれている。絵からは，学生たちが自分たちが生徒であった時の経験を，教える生徒と共有したいという意向と，言語教育に意味のある影響を与えたいという願望が読み取れた。

第二章では，Ana Sofia Pinhoが，ポルトガルの英語教育実習生（1名）に関するケース・スタディを紹介している（Pinho, 2019）。教師としてのアイデンティティの発展と時間の経過に伴うアイディンティティの変化を追った。他の5人の実習生と共に，実習生は市民性と多言語主義のコースに参加した。実習生は，小学校の英語教師としての自己の考えを絵に描き，コメントを添えた。このタスクはコース中に2回実施された。コンテント分析を通じて，同じカリキュラム構成が個人の学びとアイデンティティ構築，および変化に影響を与えた軌跡を明らかにした。ビジュアル・ナラティブは，教育実習生のマインドセットとアイデンティティ，そしてEFL教育に対する新旧の考え方を見直すことに繋がった。

第三章では，Mireia Pérez-Peitx, Isabel Civera López, Juli Palou Sangràが，スペイン（バルセロナの大学）で2つの言語教育育成プログラムを履修している50人の学生の多言語能力に対する気づきやビリーフをどのように考えているかについて検証する研究を紹介している（Pérez-Peitx, 2019）。データはコースの初めに収集された。学生には，「私と言語」というテーマで2つのビジュアル・ナラティブを描き，言葉によるコメントを付けるように指示された。結果から，ビジュアル・ナラティブから言葉の説明への変化が多言語への気づきを促したと考えられる。このデータ収集により，コースを通じて多言語能力に関する学生の複雑な考え方を理解することができた。

第四章では，Katja MäntyläとPaula Kalajaが，フィンランドで将来の教員になる候補者たちのモチベーションに関する大規模な調査の一環として，67名の教育実習生が修士課程を終えて実際に教壇に立った際に英語教育がどのように変化すると考えているかを探る調査結果を紹介している（Mäntylä & Kalaja, 2019）。「自分の夢のクラス」を想像し，具体

的な授業の絵を描くという課題が出された。絵を描いた紙の裏には，さらに詳細な記述が求められた。収集された絵はコンテント分析を通じて，実習生たちが教えたいと考える英語の5つの異なる側面を明らかにした。教育に関する学習と実習が実習生のビジョンに違いをもたらすことが判明した。修士課程を経るにつれて，教育理念や実際の授業がより複雑で洗練されていくことが示された。

第三部では，第一部，第二部と異なり，研究対象は教員志望の学生である。異なる国の教員養成講座の学生たちではあるが，将来の希望は，英語教師である。自己ポートレイトによって，教えることと教師であることに対するイメージを掴むことができる。特に，教室という状況をどのように考えていることが絵によって明確に示されることで，教員志望の学生たちの教える場と学習者の関係に関するビリーフを引き出すことができる。さらに，教員志望の学生たちの考える理想の教師像を描いてもらい，そのデータを持ち寄り教室で議論を展開することも可能である。論文を読む側も，他国における学習環境をビジュアル・データを見ることで知ることができる。

3. 研究例の紹介

前章では，*Visualizing multilingual lives: More than words*（Kalaja & Melo-Pfeifer, 2019）の概要を紹介したが，本章では，ビジュアル・データを使う研究の流れをAlice Chickの論文を例として紹介する。この論文を取り上げたのは，データとして学習者の絵を集めたこと（教える側の気づきが生まれる）と今後の日本社会で複数の言語話者が増えることが予想される中で，参考になる論文であると考えたからである。

3. 1. オーストラリアで多言語話者になる（Alice Chik）（ビジュアル・ナラティブポートレート）

オーストラリアの言語状況は，「20％から25％のオーストラリア人が英語以外の言語を家庭内で使う状況にあり，家庭内で使われている言語は英語の次に中国語（Mandarin）が2.5％，アラビア語が1.4％，ギリシャ語が1.3％，イタリア語が1.2％，中国語（Cantoness）が1.2％，ベトナム語が1.2％」（p. 17）[1]である。こうした状況の中で，「バイリンガルやマルチリンガルの人たちが自分たちのアイデンティティーを言語によって表現することは難しい」（p. 17）。多言語話者の生活に密着したナラティブに草の根的に到達する方法としてビジュアル・データを収集することにした。

研究対象者は，異なる背景をもつ12歳から72歳までの，オーストラリアのシドニーへの移住者12名であるが，継続研究のため，本論では2017年初旬までに収集されたデータに基づいて結果を記述する。自己ポートレイト（絵）と，これまでの人生でも多様な外国語学習の記録（年表）を作成してもらった。絵では，研究参加者に「自分が複数の言語をコミュニケーションにおいて使用する様子」をA4サイズの紙にカラーペンで描いてもらい，その絵を基に半構造的インタビュー）を行った。

本研究では3人の学習者のケース・スタディーを報告している。データは，ポートレイト（自画像）とインタビュー（英語）記録である。研究課題は以下である。

リサーチ・クエスチョン（研究課題）：

(1) マルチリンガル（多言語話者）であることは，オーストラリアではどのような意味をもつのか。

1　訳は筆者による。以下も同じ。

(2) 多言語話者のオーストラリア人は，自分の経験を言葉とビジュアルでどのように表現するか。それらは自身の多言語経験と感情，ビリーフ，言語認識とどのような関係があるのか。

多言語経験は多くの人にとって日常生活の一部であり，個々のナラティブにどのように到達するかが課題である。この課題に対処するために，ビジュアル・エリシテーション（visual eliciation）を用い，研究参加者が自ら描いた絵を基にインタビューを進める方法を使用した。ビジュアル・エリシテーションは，視覚的なイメージをインタビューに取り入れることで，研究参加者の反応を引き出すことを目的としたインタビュー手法の一つである。この手法は，主に社会学などの研究分野で使用されている。

3．1．1．Sophiaのストーリー

第一研究対象者のSophiaは，オーストラリアのシドニーで生まれた。彼女の両親はイタリアで生まれで，終戦後にオーストラリアに移住した。2021年時点で，オーストラリアの全人口の1.4％が家庭内でイタリア語を話すという状況にある。

図1を見た著者は，絵が言語習得と使用において何を意味するのか理解できなかったため，研究参加者であるSophiaにインタビューで尋ねた。Sophiaは，絵は彼女がイタリア語を話す際の感情と行動を示していると答えた。「オーストラリアでイタリア語を話す時にはモノトーンです。英語を話す時と同じです。表現は絵の中の手の動きの中にありますが，表情は硬いです。イタリアにいる時は全く異なり，活き活きとしています。」と述べている（p. 20）。Sophiaの両親は北イタリアからの移民で，家庭ではイタリア語が使われていた。この絵を通じて，Sophiaは，子供の頃に英語圏のオーストラリアに来た際，イタリアにいる時のように表情やジェスチャーを使い，豊かに言語を表現できないこと，オーストラリアで慣れない外国語を使う環境に置かれたことを語った。1960年代のオーストラリアは，バイリンガルとして生活するには子供にとって厳しい環境であった。アジア系の子供たちはからかわれたりいじめられることが多かったが，イタリアから来たSophiaも学校ではいじめに遭った。彼女の兄は，学校でさらにひどいいじめに遭い，結果としてイタリア語を母以外には話さなくなった。Sophia自身も，学校では，他のオーストラリア人の生徒と同じようにイタリア語を話すことを避けるようになった。しかし，学校外ではイタリアンコミュニティーに家族が住んでいたため，自由にイタリア語を使うことができた。イタリア語の新聞とラジオはイタリア語維持のために大きな役割を果たした。その後，彼女が高校に進学した1970年代にイタリア語がカリキュラムに導入され，Sophiaは授業を受けることにしたが，自分のイタリア語（話すこと，書くこと）が十分でないことに気づいた。その後，学習に順応し，大学でイタリア文学を専攻し，イタリアの文学や詩についての議論を楽しんだ。現在は2人の子供をもつ母親となったSophiaは，夫が英語話者であるため，子供たちにイタリア語を教える機会が少ないことを残念に思っている。今は，イタリア語を勉強することが流行っている。

図 1. Sophia の 絵（Chik, 2019, p. 20: Figure 2.1 Sophia's Italian hand gestures）：出典．Chik, A. (2019). Becoming and being multilingual in Australia. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 15-32). Multilingual Matters.

インタビューのみでSophiaの複言語経験を探る

場合，彼女が描いた絵に表現されている，オーストラリアでイタリア語を話す際にイタリアでのような表情やジェスチャーを使って話すことができないという内面的な感情を完全には把握できなかった可能性がある。ビジュアル表現は，無意識の内面を表現することができる。著者が指摘しているように，絵が言語学習と使用について何を表しているのかが不明確だったという課題がある。絵から描いた人の意図がわからない場合を想定し，半構造インタビューを行う方法や，研究対象者による書き言葉での補足を収集することは，より全体を理解することが有効な対策として考えられる。

3．1．2．Jessicaのストーリー

第二研究対象者のJessicaは，韓国で生まれた。韓国からの移民はオーストラリアでは大きなキリスト教コミュニティーを形成している。そこでは英語圏に住みながらも，母国語である韓国語でコミュニケーションを取ることが可能である。

Jessicaが初めてオーストラリアに来たのは，2002年に大学院の留学生としてであった。アメリカへの留学に比べて学費が安かったため，彼女はオーストラリアを選択した。オーストラリア滞在中は，韓国コミュニティーの一員でいることが居心地よかった。留学後，韓国での仕事が決まり帰国をしたが，2008年に，Jessicaは，家族と共にシドニーに移住することになった。教会のコミュニティーで韓国語を使い活動をすることは，留学時とは異なり，次第に負担と感じるようになった。韓国語のみでの交流に不安を感じ，多言語のコミュニティーに参加しなければ韓国コミュニティーに縛られることになると感じ始めた。Jessicaが描いた絵（図2）には，3つのコミュニティーが描かれている：家族，教会，大学である。家族の絵には，韓国語を話す子供たちが描かれている。この絵をもとに，筆者は，ディスカッション・クエスチョンを導き出した。言語がJessicaにとってコミュニティーを決定する要因となるのか，という疑問である。インタビューでの質問に対して，Jessicaは次のように答えている。

> 「私は子供たちに韓国語を忘れてほしくありません。彼らはオーストラリアの学校で教育を受け，オーストラリア人として育っています。自分たちをオーストラリア人だと思っています。私は，韓国語が自分の居所，アイデンティティーに深く関わっていると感じており，子供たちに母国である韓国語を忘れてほしくないのです」(p. 23)

著者は，Jessicaの事例が，オーストラリアにおけるバイリンガルやマルチリンガルであり，プロフェッショナルとして活躍する人々の家庭内での多言語教育に関する葛藤を浮き彫りにしていると述べている。

インタビューの前に研究参加者に自分の学習年表とポートレートを作成してもらうことで，参加者が多言語使用に至る過程のストーリーを構築するのに役立った。一方で，ポートレイトを媒体とした解釈

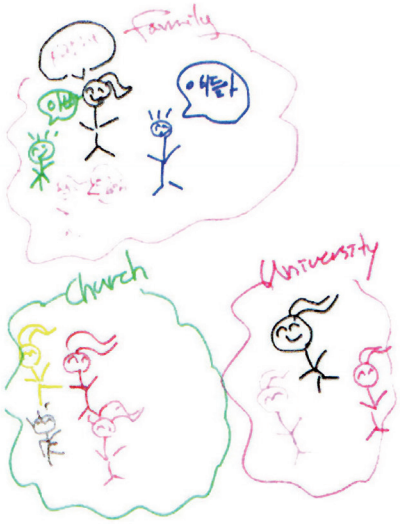

図 2. Jessica の 絵（Chik, 2019, p. 23, Figure 2.2 Jessica's language communities in Sydney）：出典. Chik, A. (2019). Becoming and being multilingual in Australia. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 15-32). Multilingual Matters.

では，別のストーリーが形成される可能性がある。ポートレイトは特定の時点や場所での情報を表すため，他のデータを収集することが好ましい。絵は英語以外の言語使用がどのような状況で行われているかを明らかにした。例えば，家庭や教会でのなどの使用が挙げられる。

この研究では，自己のポートレイトというビジュアル・データに，言語使用の場面が3つ描かれた。言語を使う自分を絵に描くことで，3つの場面（家庭・教会・大学）が明示された。描画により，Jessicaの言語に対する意識が明確になり，特に家庭での子供たちの韓国語使用の絵は，Jessicaが母国語である韓国語を子供たちに継承させたいという気持ちを表しており，インタビューでの発言にもそのことが伺える。絵を描くことで自分の考えが明確になるのかもしれない。

4. 本書の意義

言語教育と言語学習は大きく変化しており，AIを取り入れた言語プログラムが登場し，遠隔授業も普及している。このような流れの中で，学習者が持つ言語および言語学習に対するイメージも大きく変化している。

ビジュアル・データを言語教育や言語学習の研究に使用することは，時代の変化に適応する試みであると考えられる。本書にも記されているように，ビジュアル・データを使用する利点は，多言語社会における多様な学習者を対象とした場合，学習者が子供であり言語による正確なデータの収集が困難な場合，研究者と学習者の共通言語が異なる場合など，特に有効である。本書の論文を通して，ビジュアル・データをインタビューのツールとして使用する例では，学習者はビジュアル表現を通じて自己の内面を再考することができることがわかる。

この本に登場する学習者たちは，母語を含む複数言語を学び，使用する環境にいる。彼らにとっては，そこで学ぶ言語は生活に必要な道具である。つまり，それは第二言語になる。第二言語習得研究は，多くの移民を抱える国々を中心に，その国々で生活を送る上で言語習得が必須であるという環境で生まれた研究分野である。日本の言語教育においては，日本語教育がこれに該当する。英語は学校教育で広く行われてきているが，第二言語ではなく外国語とされている。学習指導要領にも「英語」ではなく「外国語」と表記されている。母語が異なる学習者が日本で生活言語として日本語を学ぶ場合，彼らを対象にした研究において，本書にあるビジュアル・データを使う研究方法は有益である。

本書では，様々なビジュアル・データを紹介している。それには自画像，写真，学習風景や教師の経験を描いた絵などが含まれる。研究者はこれらに描かれた（撮影された）内容からナラティブを引き出し，それを言葉のナラティブに落とし込んでいく。フィンランドの研究者たちが始めたビジュアル・データを用いた言語教育研究は，世界各地で第二言語教育および外国語教育に携わる研究者たちに受け入れられ，その成果が一冊の本にまとめられた。研究結果からは，国や言語が異なるにもかかわらず，言語学習における課題や学習者の悩みに共通点が多いことが読み取れる。言語教育や言語学習を研究するさまざまな国の研究者たちは，これらの研究結果に共感することも多いであろう。また，研究方法に関して新しい知見を得る機会もある。本書を通じて，ビジュアル・データやビジュアル・ナラティブをどのように研究に活かし研究を進めてることができるのか，多くのことを学ぶことができる。

文献

後藤範章（2009）．ビジュアル調査本の展開と可能性――集合的写真観察法『新情報』97，6-13.

https://www.sjc.or.jp/topics/wp-content/uploads/2018/06/vol097_2.pdf

やまだようこ，木戸彩恵（2017）.「かわいい」と感じるのはなぜか？ ── ビジュアル・ナラティブによる異種むすび法『質的心理学研究』16, 7-24. https://doi.org/10.24525/jaqp.16.1_7

Ahn, S. (2019). Using multimodal analysis to explore language learner. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 134-150). Multilingual Matters.

Brandão, A. C. L. (2019). Imaging second language teaching in Brazil: What stories do student teachers draw? In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 197-213). Multilingual Matters.

Chik, A. (2019). Becoming and being multilingual in Australia. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 15-32). Multilingual Matters.

Ibrahim, N. (2019). Children's multimodal visual narratives as possible sites of identity performance. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 33-52). Multilingual Matters.

Kalaja, P., Menezes, V., & Barcelos, A. M. F. (Eds.). (2008). *Narrative of learning and teaching EFL*. Palgrave Mcmillan.

Kalaja, P., & Melo-Pfeifer, S. (Eds.). (2019). *Visualizing multilingual lives: More than words*. Multilingual Matters. https://doi.org/10.21832/KALAJA2609

Li, W. (2011). Multilinguality, multimodality, and multicompetence: Code- and mode-switching by minority ethnic children in complementary school. *Modern Language Journal, 95*(3), 370-384. http://doi.org/10.1111/j.1540-4781.2011.01209.x

Mäntylä, K., & Kalaja, P. (2019). 'The Class of My Dreams' as envisioned by student teachers of English: What is there to teach about the language? In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 254-274). Multilingual Matters.

Menezes, V. (2008). Multimedia language learning histories. In P. Kalaja, V. Menezes & A.M.F. Barcelos (Eds.), *Narratives of learning and teaching EFL* (pp. 199-213). Palgrave Macmillan.

Melo-Pfeifer, S., & Schmidt A. F. (2019). Integration as portrayed in visual narratives by young refugees in Germany. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 53-72). Multilingual Matters.

Molinié, M. (2019). From the migration experience to its visual narration in international mobility. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 73-96). Multilingual Matters.

Paiva, V. L. M. O., & Gomes Junior, R. C. (2019). Multimodal language learning: Histories images telling stories. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 151-172). Multilingual Matters.

Pahl, K. (2004). Narrative, artifacts and cultural identities: An ethnographic study of communicative practices in Homes. *Linguistics and Education, 15*(4), 339-358. http://doi.org/10.1016/j.linged.2005.07.002

Pinho, A. S. (2019). Plilingual education and the odenttoty development of pre-service English language teachers: An illustrative example. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 214-231). Multilingual Matters.

Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Sage Publications.

Pérez-Peitx, M., López, I. C., & Sangrà, J. P. (2019). Awareness of Plilingual competence in teacher education. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 232-253). Multilingual Matters.

Skinnari, K. (2019). Looking but not seeing: The hazards of a teacher-researcher interpreting self-portraits of adolescent English learners. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 97-114). Multilingual Matters.

Sylvén, L. K. (2019). Looking at language through a camera lens. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 115-133). Multilingual Matters.

Umino, T., & Benson, P. (2019). Study abroad in pictures: Photographs as data in life-story research. In P. Kalaja & S. Melo-Preifer (Eds.), *Visualizing multilingual lives: More than words* (pp. 173-196). Multilingual Matters.

http://alce.jp/journal/ vol. 22 (2024) pp. 261 - 272 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Forum

Research on second language acquisition using visual media:

[Book review] *Visualizing multilingual lives: More than words.* Edited by Paula Kalaja, Silvia Melo-Pfeifer

Sakae, SUZUKI*

Tokyo Christiam Woman's University, Japan

Abstract

This article is a review of *Visualizing multilingual lives: More than words* edited by Paula Kalaja and Sílvia Melo-Pfeifer (2019, Multilingual Matters). This book compiles innovative research using visual data as a research method by researchers of foreign language learning. The first part focuses on "Self in Multilingualism" (research on learners in multilingual environments and languages), the second part on "Identities of Multilingual Learners", and the third part on "Multilingual Teacher Education" (research on teacher training involved in second or foreign language education). These articles highlight the visual media and research methods using visual data and discuss the benefits and challenges of using visual data on second or foreign language education research.

Keywords: visual data, visual narrative, multilingual society, multilingual education

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

* *E-mail:* sakaes@lab.twcu.ac.jp